郷土はんのう

第10号

五代将軍綱吉の生母、桂昌院の寄進と伝えられる伽羅観音。小像ながら精緻な彫刻に、たよやかな気品が漂っている。光背の飛天の姿も美しい。

（能仁寺蔵）

丹党の系譜と飯能

岡野　遼雄

飯能地方の歴史を支えた人物として、丹党の役割りは、すでに多くの指摘を受けている通りである。（『飯能の板碑』の中の新井清寿著「飯能の歴史からみた板碑」など参照）

武蔵の地に、古代末期から「党」と呼ばれる武士団がいた。これらを「武蔵七党」と呼び、その中に含める集団の種類は、さまざまである。

では、いつ頃から、一般的に流布した言葉かをみると、軍記物の『平家物語』や『太平記』がある。南北朝内乱を舞台にした『太平記』には「武蔵七党」という言葉が頻出し、「板東八平氏」の対句として用いられている。（「太平記索引」参照）

これを『武蔵七党系図』で辿ると、児玉党が詳細に残されている程度で、その多くは、南北朝、室町時代で終わっている。

古文書類からの裏付けとしては、丹党安保氏、児玉の小代氏だけである。

従って丹党加治氏や小代氏のように現存する板碑によってこの時代の家系が確認出来るのはまれである。

そこで今回は、与えられた紙数内で、飯能にかかわり合いの深い丹党の系譜を追ってみたい。

丹党系図を見ると、東国に下り武州加治郷に住んだといわれる丹治武信を祖にもつ高麗経家あたりから信憑性があります。

しばしば紹介される智観寺の「古碑三基境内ノ西ニアリ何人ノ碑タルコトヲ知ラス」『風土記稿』と記された三基の板碑は、相互に深い関連を持っていると考えられる。

つまり元久二年（一二〇五）加治家季が幕府方として畠山重忠と戦い討死した（吾妻鏡）のを契機に、境内の二枚の初発期板碑（一二五〇年までのものは、板碑の歴史の中でも極めて初期にあたり貴重とされる）は、造立されたものである。

仁治二年（一二四一）のものは、母の「五七之忌」に、また仁治三年のものは、家季の死後、「三十八年星霜」が経てからということになる。さらにこの二枚は、形態、材質、銘文等のどれを取っても非常に似かよった、対のような関係を保っている。

初期の板碑の特色とされる、蓮座のない素朴な本尊表現や、他には少ない基部の額部の作り込み、石材は普通の緑泥片岩とは異なる石墨片岩という特殊な石を利用するなど、多くの特色を揃えた板碑である。そして関東に広く分布し、総数二万五千基とも推定される板碑にあって、歴史上の固有名詞や歴史的時間を刻むのは数が少なく、「丹治家季」の銘は、威光すら放っているのである。

次に、永仁六年（一二九八）銘の阿弥陀三尊板碑を先の二枚と比較してみよう。これは、一般的な緑泥片岩を使用した、はるかに大きなものである。けれども、肝心の塔身部の長さは、ほぼ同じ大きさで、埋め方によっては地表に出る部分は同一と言える。また、この銘文では、仁治二年から下ること「五七之忌」に当たるという不思議な巡り合わせを刻むなど、明らかに先の二枚を意識したか、供養するために建てられたと思われるのである。

その社会的背景

北条氏の執権体制が確立されていく、十三世紀以降の武蔵国御家人の動きは、どのようであったろうか。

まず武蔵武士たちは、承久の乱、宝治合戦などの勲功により新補地頭に任ぜられたのを機に本貫地を離れていった。そして蒙古襲来に備えて幕府が、東国御家人の下向を命じたことも、この時代の武蔵武士の東へ、西への勢力伸長を促している。

ただ鎌倉時代の御家人で忘れてならないのは、武士は農場経営者であり、その経営地が本領＝根本私領ということである。本領の支配と経営、得分（収益）の徴収権などは、幕府によって保証されている本領安堵の御家人なのである。

そこで、一つの土地に、複数の領主権が重畳するのが、中世の土地制度である。在地領主である御家人は、決して独占的、排他的な収益を掴る、農場主ではなかった。土地を守るために、一族のものを要所に配置して、農業経営を続けていったのであり、土地に限界を感じた者は、新たな天地を求めて、東西へ勢力を拡張していったのである。

こうした状況は、武家政治における最初の成文法とされる御成敗式目によっても明らかである。五一ヵ条の内容のうち、所領関係の規定が一八ヵ条あり、この時代の所領関係訴訟の激増ぶりを反映している。

移住地と本領のつながり

しかし、他国に移住したとはいえ、武蔵国御家人は世襲してきた武蔵国内にも本領を持ち、その地名を名字として名乗っているものも数多くいた。先の式目でも、公家法に習っているとはいえ、冒頭から……

一、神社を修理し、祭祀を専にすべき事。（第一条）

一、寺塔を修造し、仏事等を勤行すべき事。（第二条）

として、地頭の修理義務の規定や、神仏への崇敬の気持ちを打ち出すなど、移住地と本領との関係には根強い地縁、血縁が残されている。

その具体例として、鎌倉時代末、播磨国元冨郡三方西荘に移住した、丹党中村氏の庶流、大河原氏と本領のかかわり合いを見てみよう。大河原氏は、備前長船景光、景政の名工の作になる刀に「秩父大菩薩」の銘を彫り、秩父神社に奉納している。東国御家人の西国移住がふえる時期、現地の人達と同化せず、東国人同志の婚姻を好むなど、いつまでも東国の本領との結縁を断やすまいとする、武士も多かったのである。

円照寺

十三世紀半ば、建長二年（一二五〇）には、加治氏が閑院内裏の造営を課されるなど、建長期の一族の動きは活発である。願成寺（川寺）、円照寺（元加治）、高正寺（仏子）等の近隣地域に残された板碑が、形態、銘文等に類似した特色を持ち、この時代の傍証となっている。

そして鎌倉幕府の終焉が、円照寺に残る、元弘三年（一三三三）五月二十二日の板碑である。これは、道楽禅門が北条氏と命運を共にした加治一族の菩提を弔う為に建てたもの。あるいは、入間川・久米川の合戦で戦死した道楽（加治左衛門入道家貞）本人の供養塔と考えられるものである。

ちなみに、この北条氏と新田勢の戦闘の激しさを物語るものとして、徳蔵寺（東京都東村山市）の板碑には、元弘三年五月十五日と十八日に飽間一族が戦死したことが、歴史上の個人名と年令をもって刻まれている。

黒田直邦と荻生徂徠

さて、時間は三百余年を経て江戸時代に入る。

黒田直邦は、丹党中山氏の出であるが、母は上野館林十五万石の領主（後の五代将軍）綱吉の家老、黒田信濃守直相の娘であったことから、幼年期より外祖父のもとで養育され、黒田を名乗っている。

綱吉は、館林藩を廃して本家を継ぐ時、多数の家臣を連れて来て幕臣とした。また、将軍になっては、気に入った者を取り立てたこともいわれる。

柳沢吉保もその一人で、三百七十俵の切米取から、宝永元年（一七〇四）には、甲府藩十五万石の大名へ抜擢されている。このような時期、将軍綱吉が柳沢邸への途次、黒田邸へ寄る『徳川実紀』などの記事が多く、また、直邦が加増や地位の向上も多く見られるのである。直邦の正室は、柳沢吉保の養女であった。

ところが綱吉の死によって側用人は退けられ、側近として仕えた直邦も、この後や不遇をかこつことになったが、享保期になって、吉宗によって登用されることになる。

荻生徂徠もまた元禄九年（一六九七）以来、柳沢家の家臣となっていたが、この事件ではり主家が没落し、浪人儒者として野にあった。が、やはり吉宗に知遇され世間に知られた人である。まず享保元年、吉宗の初政批判をした『太平策』を幕府に献上しているが、その中でも、直邦と徂徠の関係は深く、

・『徳廟（吉宗）ノ時、黒・田・豊・前守殿ヨリ以政事ノ儀認メ差出スベキ旨仰出サル二付、太平策ヲ書上ラレシガ、加納遠江守有馬兵庫頭両人ノ手ヨリ出ショシ』（『護園雑記』）

黒田直邦墓

などを手始めに、直邦は〝吉宗のブレーン〟として、享保時代の為政者の全領域にわたって活躍している姿が見られる。

この『六論』の四、五章を詳説し、政治理想論ではなく、現実の政策を具申したのが、続く『政談』である。この内容と享保の改革を比較すうなば、享保十一年の三笠付け及び博奕の禁止、享保十五年になくなった上米の制、元文元年（一七三六）の貨幣改鋳や倹約令、徳政令、棄損令などと似かよった政策が非常に多いことが気づかれるであろう。

さらに享保の教育政策では、それまでの儒教的に厳しい為政者を目指した教育ではなく、権力者に忠順な精神を庶民に養成しようとしているのである。享保六年（一七二一）吉宗の命により『六論衍義』に徂徠が訓点をつけることになった。六論とは、

一）父母に孝順なれ
二）長上を尊敬せよ
三）郷里を和睦ならしめよ
四）子孫を教訓せよ
五）おのおの生理に安んぜよ
六）非為をなすことなかれ

という六ヵ条よりなる徳目で、

清の世祖順治九年（一六五二）に頒布された教育勅論である。吉宗は、これを庶民教育に利用しようと考えたのであり、また『六論衍義大意』なども江戸市中の手習師匠に手本として用いるよう指導されている。

太宰春台のこと

「中山勘解由抔ハ厳シキ男ニテ」（『政談』巻之一参照）と、ただ中山氏の行状を綴っている徂徠門下に、大宰春台（延宝八年～延享四年）がいる。名は純、字は徳夫、通称を弥右衛門という。春台は号であった。

この春台が、正徳元年（一七一一）、三二才の時に江戸に帰り、同門の安藤東野の誘いで、徂徠に対面し、その門下で学ぶことになった。入門の際、彼は詩文、経学等に関する相当の学力や見識を備えていたとされる。

こうした春台を、徂徠は〝鶏助視〟していたという伝えもある。鶏助とは雞の肋骨で、食べる程ではないが、捨てるのは惜しいという肉で、大した価値はないが捨て難い比喩とされる。

だが「徂徠ハオヲ愛スルコト甚シキ人ナリ」とあるように、包容力に富んだ教育者であり、門人が独自の見識を立てて、自己の学説を発展させてくれることを喜びはするが、白眼視するような人ではなかったらしい。（広瀬淡窓『儒林評』）徂徠にしてみれば、自分の学問の中核をなす「天下国家ヲ治ムル」の経学分野の後継者は、春台であったと思われるからである。

春台も、次第に学者としての名声が高まるにつれ、大名の尊信を集めるようになる。中でも、

○黒田直邦

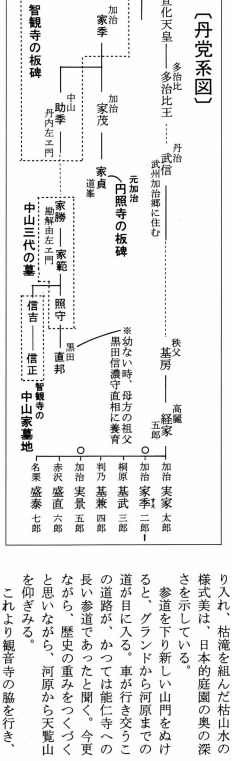
○本多伊予守忠統（若年寄）

○柳沢刑部少輔経隆（吉保二男）

らの二人は、それぞれ家臣に準じた扶持米を春台に送ったという。

享保十七年（一七三二）、直邦が西丸老中職にあった時、春台は政治に関する意見を幕府に献上するのに、直邦がともかく試みるにはと答えたので、直邦を通じて将軍吉宗に上書を提出したのが、『春台上書』として伝えられるなど、徂徠一門の経済思想が大きく取り上げられている。郷里を和睦ならしめるため、社寺復興や新田開発に尽力した直邦の頌徳碑は、春台の撰ならびに書になるものである。

〔丹党系図〕



智観寺の板碑

秋晴れの暖かい日、歴史ある飯能を少しでも知ることができたらと中山散歩に参加する。

先ず能仁寺へ、格式ある禅寺だ。十月なのに参道には紫陽花がいまだに咲き残り、まるでドライフラワーのように、しぶい色をみせている。梅雨時にはどんなにか両側が花の路となることであろう。参道をぬけると本堂西方にある中山家三代家勝、家範、照宗の墓を見学。本堂裏の庭園も御好意に預り拝観。立派な美しい木の香りの漂う廊下からの眺めは、また格別の美しさだ。天覧山の斜面を巧みに取り入れ、枯滝を組んだ枯山水の様式美は、日本的庭園の奥の深さを示している。

参道を下り新しい山門をぬけながら、グランドから河原までの道が目に入る。車が行き交うこの道路が、かつては能仁寺の長い参道であったと聞く。今更ながら、歴史の重みをつくづくと思いながら、河原から天覧山を仰ぎみる。

これより観音寺の脇を行き、昔の天泉寺横丁を通り、出世稲荷、第一小学校校庭にあるなじゃもんじゃの木、鶴舞地蔵、瑠璃光薬師を経て、昔の牛舎の跡という野原を登りながら、智観寺へと向かう。

智観寺には、中山信吉、信正の墓、それに板碑がある。信吉の墓は、本堂西方の苔むした石段を十数段上がった所にひっそりと建っている。墓の大きさから、当時の権力をしのびながら、宝物館・板碑や仏像、木碑など数々の文化財を拝見した。今日は住職の特別の御好意に預かり、このように貴重な文化財を拝見でき、また、解説もして頂き、大変有難かった。

智観寺を辞して、天神様の筆塚から、聖望学園の裏手にある涙橋、見返り坂を歩き、中山館を守っていた千種稲荷を詣でて、今日の一日は終わった。

古くから、飯能にいろいろな文化をもたらした中山氏をしのびながら、歴史の重みをしった一日であった。

「ケツあぶり」の火よいつまでも・・・

判野史郎

無病息災を祈って門火を焚き、家族そろってうしろ向きにこの火を囲んで尻をあぶるという奇習〝ケツあぶり〟の行事が、原市場地区内には今なお一部で伝承されている。

そのむかし、焼畑農業が営まれたことから、それが地名となったと思われる大字赤沢地内の黒指地区（全十数世帯）が、この地方でも最後までこの民俗行事を受け継いでいる集落である。

例年なら麦の穫り入れも済んだ七月八日の夕刻、各家毎に家の門口で麦藁（今ではそれと限らないが）を焼やし、その火に家力中が尻を向けて立つというものだ。この火の中には小麦粉・茗荷の葉などに包んだものを入れて焼く。そして、火が焼え尽きると、なぜかそのうちの一個を野良犬のために残し、あとの二個は持ち帰って家族で分けて食べると病知らずで通るといわれるものだ。

この奇妙な行事を知らない通りすがりの人々には、「ハテ、今夜は盆にはまだ幾日か間があるが……」と、不審に見える光景であろう。この変わった風習も、麦作りの盛んだったころには、どの家も競って大束の麦藁に火をつけたから、この辺では盆の門火よりもはるかに盛大だったという。しかし、今ではほとんの数戸のみが続けている過ぎず、燃やす物も杉の葉、木の枝、製材の端切れ、商家ではダンボール箱等々、思い思いの燃料だ。お上品ぶって、「お尻あぶり」などといってみても、この素朴な行事には到底そぐわない。やはり、（ケツあぶり）の方が似合う。

この行事もひとむかし前までは各地で行なわれていたようで、それだけにことの由来も各地で異なっていた。名栗村のある古老の話では、遠く鎌倉時代にさかのぼり、妻坂峠を越え鎌倉へ向かう秩父の兵士たちに、折からの肌冷えする梅雨どきのことと、沿道の住民たちが焚火に焼餅でねぎらったのが始まりだという。吾野地区では、愛宕山に巣食う山賊どもを退治するため、はるばる遠征してきた鎌倉の軍勢をもてなした、というもの。それゆえに、この行事はその武士団が通過した沿道に定着して受け継がれ、南川から天目指峠を経て森河原に至り、下名栗、赤沢と来て石倉から山王峠を越えて南高麗に受け継がれた、との説がある。しかし、今の直竹あたりの老人たちには知る人もいない。

先年、埼玉県教育長をつとめた長井五郎氏の著書、『埼玉の民俗　年中行事』によれば、この風習は県の西部山麓で、入間・比企一帯にあり、元来は六月一日の行事だったようだ。今では七月一日や、この黒指地区のように七月八日と、まちまちに行なわれている。

また、東松山市高坂の岩殿観音の寺伝によると、

「坂上将軍東征の折、大蛇を射た。時六月の初め。鉄も溶かす程の炎暑に忽ち極寒襲い、積雪尺に余る。人々庭に火を焚いて寒気を凌ぐ、近頃六月一日、家毎に火を焚くはその時の名残り……」

と、『新編武蔵風土記稿』ではいう。

人体にまで一面カビの生えそうな湿度の高い梅雨期に、火を焚いて少しでもあたりを乾燥させて保健につとめ、新しく出来た小麦の粉で餅をつくって異国の神に感謝の意を表わす、およそこんなところから起こった風習かも知れない。

この（ケツあぶり）という極めて奇抜な行事も、ただむかしからそうしてきたから……と受け継がれるだけで、どこのたれにも確かな説明はつかない。また、無理に理屈をこねることもない。この素朴で、しかも滑稽味溢れる〝ケツあぶり〟、「最後の火を消さないで……」と希うばかりである。

郷土館　これからの催物

八月
戦争展（仮称）
夏休み子ども歴史教室
夏休み宿題相談コーナー

十月
飯能文人展（仮称）
ダンゴ作りと十五夜

十一月
古文書講座

十二月
わらじ・標縄作り

一月
昔のあそび（未定）

二月
講演会（考古学関係）
雛まつり展

シリーズ・地場産業めぐりⅢ

酒蔵と窯元を訪れて

内野　博司

二月十八日には、地場産業見学が行なわれた。今回は、地元の造り酒屋であり、関信越局の鑑評会で金賞を受賞された川寺の「五十嵐酒蔵」と、飯能の原材料を使って「飯能焼」をよみがえらせようとしている中藤の「破草鞋窯」を見学した。

五十嵐酒蔵

午前中は、五十嵐酒蔵を訪れ専務の五十嵐智男氏から説明を受けた。この日は、各種の酒を試飲させていただくとのことになっていた。到着後まもなく、試飲が始まり、あらかじめ用意されていた市販の日本酒や五十嵐酒蔵の「天覧山」をはじめとするさまざまな酒が飲み比べられた。また、自家特製の奈良漬も出された。試飲酒の中でも、最高級酒の「無」は好評であった。

「無」のような高級な日本酒では、「山田錦」などの酒米が用いられる。日本酒の原料としての酒米は、ふつう食べる米よりもさらに精白され　五十～六十パーセントの重さにしてしまうと言う。これは、「みがき」とよばれる。

最近、生酒とか、吟醸酒とか、今まで耳にしなかった用語を聞くことが多くなったが、これらは、原酒の殺菌方法や、製造方法のちがいによるものである。

数年前から、「バイオテクノロジー」という言葉がもてはやされ、ブームとなっていて、新しい技術と思われがちであるが、酒つくりなどは、まさに、「バイオテクノロジー」そのもので長い歴史をもっている。微生物による「発酵」と言う能力を利用した魅力ある産業の発展することを願っている。

破草鞋窯（はそうあいがま）

次の見学地は、破草鞋窯で、飯能郷土史研究会の会員でもある岸道生氏は、昭和五十七年に、当地に窯を開かれた。

「破草鞋窯」の名前は、使い古され何の役にも立たない草鞋を他の用途によって、再びよみがえらせようとする禅の精神から名づけられた。

最初に、陶器ができあがるまでの行程を見た。原料である粘土や灰の確保・調整には、岸氏は非常に気を使われている。最近各地で陶芸が行なわれるようになったが、それらの多くは、すでに調整され、すぐに使える状態となった粘土や釉薬を用いている。それらは、安価でしかも使いやすい。しかし、岸氏は、地元の飯能で産出する粘土や灰を使用している。粘土は、粒子を細くし数種のものを混練されたあと長期間熟成される。飯能にかつて「飯能焼」が存在した背景には、周辺に相当な量の粘土があったことが指摘される。今後、仮に二十名位の陶工が埋蔵する粘土を使用したとしても数百年の量があるという。

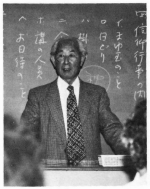
陰干しなどの行程の説明を受けた後、ロクロによる成型の実演が行なわれた。ひとかたまりの粘土から、生き物のようにだんだんと姿を変え、形ができ上がっていくのに見学者一同魅了された。

見学後、遅めの昼食を原市場公民館で食べた。公民館では、新井清寿氏によって、「昔の産業のルーツを尋ねて」の講演が行なわれた。

山間部の多い飯能地方は昔から水田は少なく、江戸時代でも穀物の自給はできなかったため、主穀生産以外の仕事に従事せざろうえなかった。材木・炭焼き・養蚕・織物・石灰・製茶など一般に知られている。これらのことについて、興味ある資料が説明された。

その他に今では全く見られなくなってしまった紙漉などかなり広く行なわれていた。また、綿や漆も栽培されていた。変わったものでは、何首烏（しゅうこん）の栽培、薩摩芋のツルドクダミ（ツル）の試作、門松のこと、菰の木のことなど珍しい話題について紹介が行なわれた。

平成1年度の活動



文化協会二十周年記念誌「はんのう文化」に原稿を書くにあたって、改めて郷土史研の歴史を調べた。設立、昭和四十八年七月。

十七年の歳月を経て、今やっと市民の歴史文化の担い手、郷土史研、ここにあり、と言えるようになったのである。

この長い時の流れに気付いた時、急に郷土史研が愛おしくなった。設立にたずさわった方々の熱い思を、大切に受け継いでいかなければ、今、そんな思いで、この一年間を振り返っている。

五月例会

五月十三日(土)

◆おしらこうさまざま
講師　坂口和子　氏

例年なら四月に行なわれるのだが、市議選と重なり、五月に変更。民俗学的見地から坂口さんに、そして、岩渕の松下まさる・高橋操・増田しツ・高橋わか子さんには、三年前まで実際にやってきた体験談を話していただく。

六月総会

六月三日(土)

◆記念講演　祭りと信仰
講師　千嶋　寿　氏

初めて市民会館を会場に秩父民俗資料館長、千嶋氏が、風土に密着した信仰を論理的に解説。参加者も五十名近くとなり、小さな歩みが今やっと花を咲かせてきている。

会終了後、懇親会を海燕で開く。

◆「郷土はんのう」第九号発刊

なお郷土史研では、総会で新年度会費（一、五〇〇円）を納入して頂くようにしています。

当日欠席の方は、事務局、または出席される方まで、会費をお届け下さい。

八月例会

八月二十六日(土)

◆今、縄文時代がおもしろい
遺跡・石器・土器・発掘
講師　曽根原裕明　氏

郷土館オープンに先がけて、多くの市民に郷土を知ってもらうという意図から、飯能の出土品展を行なった。中央公民館と初の共催行事。中公ロビーを会に九月二日まで展示。特に小学生にもパンフレットを配りPR。

二十六日には曽根原氏の講演会も行なう。スライドを使っての遺跡の説明は迫力があった。

十月例会

十月二十三日(土)

◆第五回　郷土歴史散歩
――旧飯能めぐり――

能仁寺から中山智親寺へと、歴史散歩初の徒歩でのフィールドワーク。ロマンティック街道と名付けたこの界隈は、なんとなく往時が忍ばれて歴史の流れに身を置きたくなる雰囲気だ。

（岡野氏・児島さんの稿参照）

十二月例会

十二月二日(土)

十月の歴史散歩の事後学習会。

◆中世の生活　岡野達雄　氏
◆能仁寺よもやまばなし　浅見徳男　氏
◆八王子歴史資料館を訪ねて　西村一男　氏

文化財展

十一月二日～七(土)

市の文化祭行事に、文化財保護審議委員会と合同で参加。特に会期中は当番としても協力。

体験コーナーは連日家族連れで賑わった。

二月例会

二月十八日(日)

◆地場産業めぐり
やきものと酒

破草鞋と五十嵐酒蔵を訪ねる。初の日曜例会

（内野氏の稿参照）

会員も一六六名と増えた。その中にはかつて飯能にゆかりのあった方が、ふと古里に思いをはせて、入会して下さった方もいる。今後はこの方々のためにも、未来を担う子ども達のためにも、また、日常の営の中で人生を問い直した時、私には飯能があるのだ。この風土を愛し、歴史を愛する、そう言い切れる飯能でなければと思う。そのベースに郷土史研がなれたらと思っている。

平成二年度 行事予定

●四月　郷土館展示説明会と講演会の集い

●六月　総会、並びに記念講演会、講師有元修一先生
郷土はんのう十号発刊

●八月　比企周辺歴史散歩

●十月　郷土歴史散歩
精明地区めぐり

●十二月　事後学習会

●二月　地場産業めぐり

本年度は、市内、市外と二本立ての歴史散歩を企画しました。特に慈光寺を中心にした比企周辺歴史散歩は、川越以来二年振りです。ご期待下さい。

郷土史研では、会員の声を反映した行事をと考えています。

一つの例として、総会を日曜日にしてみましたがいかがでしょうか。ご意見、ご要望をお聞かせ下さい。

本会の会員でもあられる小山市長時よりテープカットが行なわれました。（右端　梢田市議会議長）

郷土館オープン！

目を見張る「軍荼利明王立像」

優美な「雲版」

四月二十日、一年間の準備期間を経て、ついに郷土館がオープンしました。郷土はんのう第七号で〝郷土館に望む〟というアンケートを特集しましたが、今の思いはいかがでしょうか。〝郷土館で会いましょう〟こんな合言葉で気軽に利用しながら研究の場にもしていけたら、と思っています。

◎新入会員

植竹芳雄（下畑四五三）
黒沢いね（川寺一六六）
三谷まさ子（川寺一六一）
水野兵三郎（中藤下郷六一七）
小沢恵子（双柳三五三）
岸　道生（中藤上郷四一三）
羽原淑子（美杉台四一十三一九）
粕谷紀代子（岩沢五七三）
新井寧子（川寺八三一一）
滝沢　功（豊島区長崎三一一一四）
久保田学子（双柳二一四）
内沼とよ子（川寺九七）
堀越喜代子（仲町五）
沼部時井（中山六六六）
村里泰由（落合五二一一）

事務局が郷土館に変わりました

事務局の流れを見ると、図書館、社会教育課、郷土館と変わりました。その都度、赤田さん、仲島さん、今年度からは柳戸さんにお手数をおかけ致します。

ご入会の手続き

会費納入など

郷土館でお願いします

＊事務局　〒357
飯能市飯能二五八一一
飯能市郷土館内（柳戸）
電話　〇四二九七二二四一四

郷土館友の会

オープンと同時に発足

友の会は郷土館を後援し、また歴史文化を広めながら、独自の事業を進めていきます。いわゆる、官、民一体となって文化を築いていくという試みからは、今までにない新しい何かが生まれてくるでしょう。

この友の会作りには、各分野の方々が発起人となり、郷土史研が陰で支えてきました。

四月二十二日の集いには、多数の方がつめかけ、井上峰次氏の「郷土の重文」という話に、聞き入りました。

現在、三五〇名の方が入会しておりますが、まだの方は是非ご入会下さい。

役員は次の通りです。

会　長　大　野　邦　弘
副会長　杉　田　多可雄
〃　岸　道　生

編集後記

郷土館の周りは、緑の森と居ごこちのよい空間が広がり、緩やかに時が流れています。

刻々と変わる緑の風景には、過ぎ去った感情を呼び起こす何かが潜んでいるのでしょうか…。たまらなく過去が恋しくなって、たまらなく未来に憧れたくなったら、郷土館へ行って深呼吸してみて下さい。

歴史が未来を予言するように郷土館をデートコースにして、新しいあなたを再発見してみませんか……。

季節が移ろうように、いつのまにか〝郷土はんのう〟も十号を数え、一つの時代が通り過ぎたように思います。

新しい歩みを始めなくては…。それは、皆様の力にかかっています。一緒に歴にかかっています。一緒に歴史を作っていきませんか…。

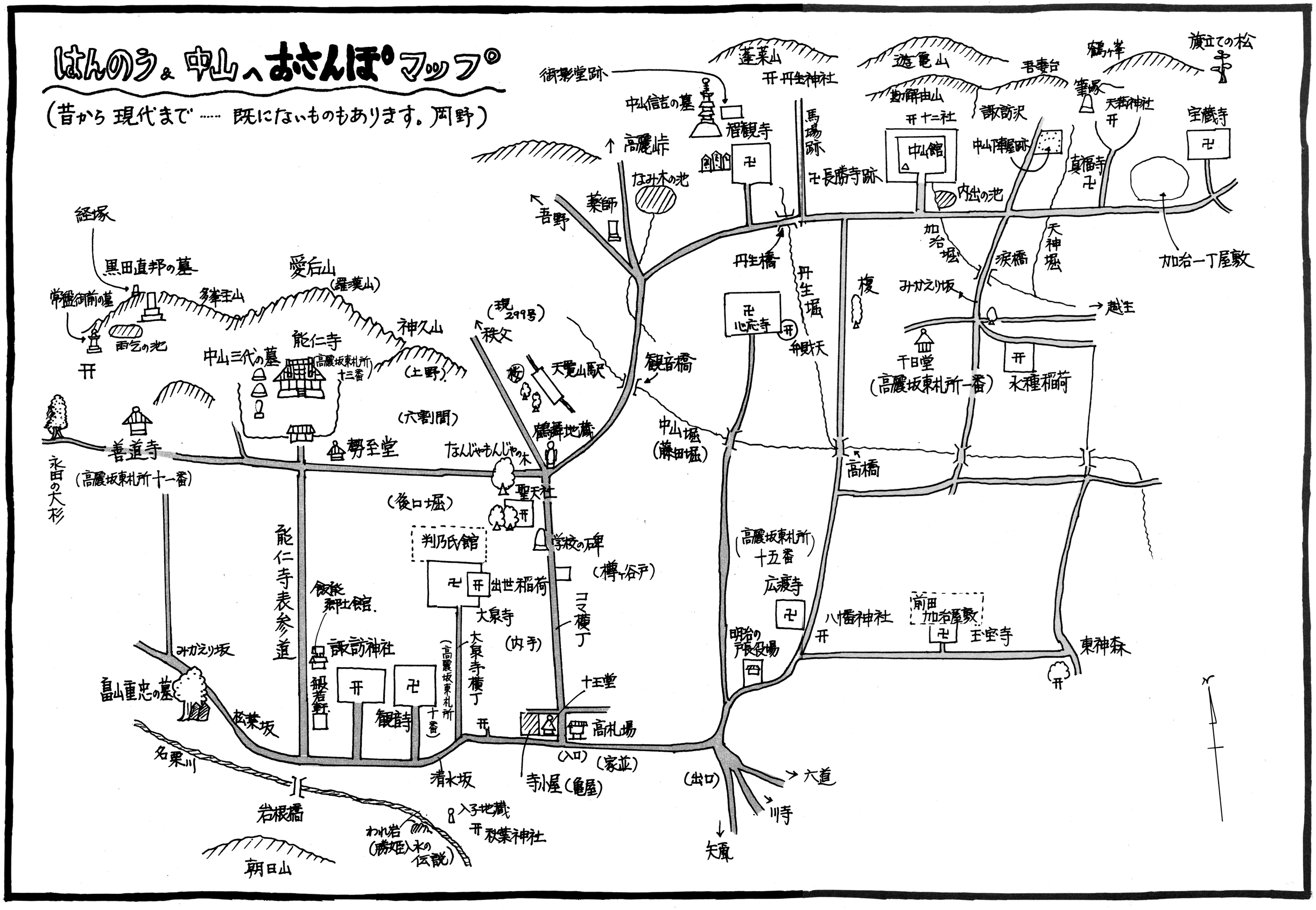
（桑山）

題　字　小谷野　寛　一
表紙写真　井　上　峰　次

郷土はんのう　第十号
発行日　平成二年六月十日
発行所　飯能郷土史研究会
飯能市郷土館（〒三五八一一）
飯能市郷土館二五八一一
電〇四二九七二二四一四
印刷所　コバヤシ印刷

はんのう&中山へおさんぽマップ

（昔から現代まで…… 既にないものもあります。岡野）



「郷土はんのう」第10号付録　作：岡野達雄氏